ミュージアム展示解説シート

肥後金工① 肥後鐔の四大流派

鐔とは

鐔は、刀の柄と鞘の間に挟み、相手の刃から自分の手を守るための実用的な金具です。そのため、簡単には割れない強靭さが必要です。また、持ち主の趣味を反映して、多様なデザインと文様で飾られています。

肥後拵に似合う鐔

江戸時代、これら刀装具を作る技術は、それぞれの藩の好みに応じて発展していきました。

細川家でお手本とされたのは、すぐれた武将であり茶人でもあった**細川三斎**（1563～1645）が好んだ刀装のスタイルです。これを**肥後拵**と呼んでいますが、その特徴は、実戦向きであり、茶の湯の美意識にも通じる風格を備えているという点です。

例えば、肥後拵は、鐔と栗形の間が、ちょうど三本の指が入る長さになっています。これは刀を抜くときに、容易に鯉口を切る（鞘から刀が抜ける）ための工夫といわれています。肥後鐔は、こうした肥後拵に似合うように、形・デザイン・バランスを考えて作られたものです。

肥後金工四大流派

肥後金工を代表するのが、**林**又七、**平田**彦三、**西垣**勘四郎、**志水**仁兵衛をそれぞれの初代とする4つの流派です。

肥後金工の発展に大きな影響を与えた細川三斎は、寛永9年（1632）肥後入国に際し、八代城へ入りましたが、このとき、甲冑や鉄砲、塗り物や飾り金具を作る職人を何人も連れてきました。

その中に平田彦三がいました。西垣勘四郎は彦三の弟子、志水仁兵衛は彦三の甥であり、彼らが住んだのが、はじめ八代であったということは、ここ八代は肥後金工の発展にとって重要な場所であったということができます。

細川三斎像（1563～1645）

肥後鐔の名工たち

三階松透鐔　無銘 林又七
熊本県指定重要文化財

林又七

林派の初代又七の父は、尾張出身の鉄砲鍛冶ではじめ加藤清正に仕えた。加藤家改易後、浪人するが細川家に抱えられ、鐔工となる。尾張透鐔の影響を受け、さらに京正阿弥の象嵌技術を学んで大成したと伝えられる。鉄色が抜群で羊羹色を呈し、精緻な透彫と布目象嵌に大きな特色がある。

林又七(重吉)---重光(藤平)…重房(藤八)…重次…重久(又平)…

…又八…藤七

平田彦三

初代彦三の父は松本因幡守といい、丹後国で細川家に仕えた。母は小侍従といい、明智光秀の娘玉が細川家に輿入れする際、付人としてお供してきたという。

彦三は父没後平田姓を名乗り、百石を支給されて藩の金銀貨幣などの鑑定に従事。三斎の命で金工の修業に努め家業とする。細川家の肥後入国に際しては、三斎に従って八代袋町東角に屋敷を拝領。

地金に雅趣があり、覆輪の技術などにすぐれたものがある。

平田彦三…彦三(養子、この代で廃業)

唐草文象嵌鐔　無銘　平田彦三

二引象嵌鐔　西垣勘四郎（二代）

西垣勘四郎

初代勘四郎は、豊前中津生まれ。父は丹波国の神官。平田彦三の門人となり、八代に移住。相伝免許を得て独立し、熊本職人町に移る。

西垣派は、技巧みにして繊細優美なところがある。

西垣勘四郎(吉弘)…勘四郎(永久)…勘四郎(仁蔵)…勘左衛門(吉教)

…勘左衛門（正久）…四郎作(良久)…勘左衛門(良正)

志水仁兵衛

平田彦三の甥で、彦三没後八代袋町の屋敷を譲り受け、代々八代に住した。二代以降甚吾と名乗る。

鉄地に、猛禽・鶏・牛・龍・鯉などを真鍮で大胆に据文象嵌した豪快な作品が特徴。西垣派に入門しているため、透鐔もある。

志水仁兵衛(一幸)…甚五郎(永次)…甚五(永義)…甚吾(永次)…

…（茂永)…甚吾(永典)

勝虫蟹図鐔　無銘　志水派
いずれも八代市立博物館蔵

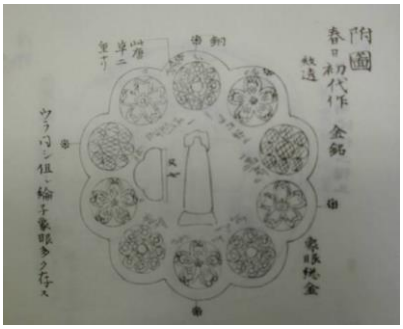
ミュージアム展示解説シート

肥後金工②『肥後金工録』

江戸時代、肥後熊本で生産された装剣金具（刀を納める鞘や柄に施された金具類）は、美術品として高い評価を受けています。 その価値に着目し、全国的にその名を広めるのに貢献したのが、明治35年に出版された**『肥後金工録』**です。

土佐出身で陸軍大佐として熊本に赴任した長屋重名氏によって著わされたこの書物は、肥後金工研究の端緒を開いたばかりでなく、今なお研究の指針として必読の書となっています。

この書物の中で、肥後金工の代表的流派はどのように取り上げられているでしょうか。



林又七といふ者あり。その祖は鉄砲鍛冶にて、かたわら金工たり。加藤清正朝臣につかへて、はやく肥後にありしが、寛永年中、我が細川家につかへて同じく金工となれり。こは同国春日村に居りしかば、世には春日鐔といへり…

――――――『肥後金工録』序文より（細川護美氏寄稿）

此作肥後金工第一等と称す。鉄及銅赤銅四分一等諸作あり。就中鉄色は絶類にして、其地合のしまりよく麗はしき事は譬へんにものなし。又布目象眼は尽く精妙を極め、又彫込象眼は雅致あり。共に絶品なり。

――――――『肥後金工録』本文より

肥後の金工は我が遠祖三斎君の未だ丹後におわせし時、平田彦三といふを用ひられしにはじまれり。彦三は近江の人にて、その頃の手ききなりしが、やがてその技を君に伝えまいらせ……

――――――『肥後金工録』序文より（細川護美氏寄稿）

……此作春日とは別趣なり。地鉄強くかつ澤あり。鐔の式は木瓜形・丸形・長丸形等種々あり。その櫃の式概ね大形なり。又焼手クサラカシを用いるもの多し。……鐔の作地、金烏銅・真鍮・銅の類最も多く、鉄地は割合には少なし。総て古意ある作行にして絶えて俗気なし。其薄出来には、古正阿弥の作の如き、又或は三斎公作の如きものもあり。概して品格高く見ゆ。尋常工人の作と異なる所以なり。……此作地金の何に拘はらず覆輪鐔多し。至て見事にて就中小田原覆輪の如きは独歩と称す。……　――――――『肥後金工録』本文より

また西垣勘四郎といふものにも授けたり。勘四郎は後に附従して肥後に来り、その子孫代々この技を伝えぬ。これを勘四郎鐔及び縁頭といふ…――――――『肥後金工録』序文より（細川護美氏寄稿）

地鉄は概ね其師彦三に近きといへども稍サックリとする心あり。まゝこれに反し鏡面の如きも見ゆ。据物象眼彫透の諸法いずれも見事なり。殊に勝れたるは縁の作なり。……鐔の形は大かた丸き下張りに作る。眞丸・及びアヲリ形・木瓜形は稀。……鐔亦工にて式は種々あり、桐・松・梅・菊等多く見る。まゝ又七の壮年作に髣髴たるもあり、然に細に見れば第一其櫃の式又耳の法異れり（耳櫃肉置多くは尖り勝手なり）……真鍮鐔には名作見ゆ。…ホリ上・ケシ込・据物・地透物あらざるなし。……　――――――『肥後金工録』本文より

平田の一族にて志水甚五郎といへるものの作を甚五鐔といひ…

――――――『肥後金工録』序文より（細川護美氏寄稿）

初代作行総て古雅なり。鐔の式は多くはアヲリ形・木瓜等にて環耳スキ下ケに作るものもあり。概ね厚造のかたなり。且肌物勝ちなれば一見甚美とはいひかたきも却趣あり。据物布目象眼共に著名にして、其天龍・鯉等は据物ホリ共にあり。人物・蟹其外動物類は専ら据物に作る例なり。牛は彫上にて名代たり。雁・糸巻・菊は重に真鍮張金なり。布目は金銀いずれもあり。就中布目銀すりはき象眼は妙とす。又地鉄に焼手クサラカシと唱ふ法あり。最得意の如し。案ずるに其師彦三伝来ならん。但彦三に比して深く入るかた故に一層強く見ゆ。……

――――――『肥後金工録』本文より

肥後金工略系図

『肥後金工大鑑』『刀装金工事典』をもとに作成

1600 1650 1700 1750 1800 1850

林（春日）派

父は尾張出身の鉄砲鍛冶で加藤清正に仕えた。加藤家改易後、浪人するが細川家に抱えられ、鐔工となる。二十人扶持。尾張透鐔の影響を受け、さらに京正阿弥の象嵌技術を学んで大成したと伝えられる。鉄色が抜群で羊羹色を呈し、精緻は透彫と布目象嵌に大きな特色がある。

1605頃 1691頃
①又七（重吉）
…二十人扶持、細川家の抱工となる。

1652頃 1729頃
②重光（藤平）…五人扶持十五石

1770 1823
⑤重久（又平）…五人扶持十五石

1711頃 1779頃
③重房（藤八）…五人扶持十五石
藩命により神吉寿平に家伝の秘法を伝授

1840
⑥又八…五人扶持十五石

1744 1784
④重次…五人扶持十五石

1874
⑦藤七

神吉派

祖先は丹後田辺の出身。細川家について豊後を経て肥後に来住。深信・楽寿父子はともに上手で、とくに楽寿は又七の再来といわれた。人間国宝の故米光太平（1880－1980）は、楽寿に教えを受けた田辺保平（1830－97）の甥で、伝統技法の継承と後継者の育成に尽力した。

1754 1820
①忠光（正忠）…林藤八の門人、神吉姓を名乗る

1786 1851
②深信（寿平）

1817 1884
③楽寿

平田派

彦三の父は松本因幡守といい、丹後国で細川家に仕え百石を支給される。主家に従って豊前中津に移り、三百石に昇給。母は小侍従といい、明智光秀の娘玉が細川家に輿入れする際、付人としてお供してきたという。彦三は父没後平田姓を名乗り、百石を支給されて藩の金銀貨幣などの鑑定に従事。三斎の命で金工の修業に努め、家業とする。細川家の肥後入国に従って、八代袋町東角に屋敷を拝領。地金に雅趣があり、覆輪の技術などにすぐれたものがある。

1635
①彦三

1675
③彦三（養子）…この代で金工を中絶し、藩命により西垣勘四郎に伝授する。以後は金銀改め役に従事。

1686
②少三郎…十人扶持二十石、彦三の没後熊本に移る。

西垣派

初代勘四郎は、豊前中津生まれ。父は丹波国の神官。平田彦三の門人となり、八代に移住。相伝免許を得て独立し、熊本職人町に移る。西垣派は、技巧みにして繊細優美なところがある。

1613 1693
①勘四郎（吉弘）…二十人扶持

1639 1717
②勘四郎（永久）…十二人扶持、綱利の命により、京都後藤顕乗家に数年入門

1791 1850
⑥四郎作（良久）

1680 1761
③勘四郎（仁蔵）

1820 1878
⑦勘左衛門（良正）
…三人扶持

1723 1780
④勘左衛門（吉教）

1770 1819
⑤勘左衛門（正久）…三人扶持、江戸熊谷義之家に入門

志水派

代々八代に住したのが志水派。鉄地に豪快な据文をほどこした作品が特徴的だが、西垣派に入門しているため透鐔もある。

1675
①仁兵衛（一幸）…彦三の甥、彦三没後三斎の抱工となり、八代袋町東角の屋敷を譲り受ける。初代を除いて甚吾を名乗る。五人扶持。

1620 1710
②甚五郎（永次）…三人扶持

⑤甚吾（茂永）

1691 1777
③甚五（永義）…西垣勘四郎に二十年ほど入門

⑥甚吾（永典）

1746 1823
④甚吾（永次）

ミュージアム展示解説シート

肥後金工③　鐔を楽しむ―鑑賞入門―

鐔に限らず、日本の古美術を鑑賞するには、まず部分名称や材質を覚えることから始めるといいでしょう。現在でも、刀の名称に由来する言葉が日常的に使われているものがたくさんあります。

名称を知る

元の鞘におさまる

刀の反りは一本ずつ違い、全く同じというものはない。刀の鞘もそれに合わせて作るので、反りの違う他の鞘におさまるということは殆どない。「反りが合わない」というのもここからきた言葉。

鞘当　恋の鞘当などという言い方をするが、他人の鞘に自分の鞘を当てることはたいへん無礼なことで、これが原因で果し合いになることも多かった。刀は左腰に差して歩くので、鞘同士がぶつからないよう道の左側を歩くようになった。これが左側通行の始まりという。

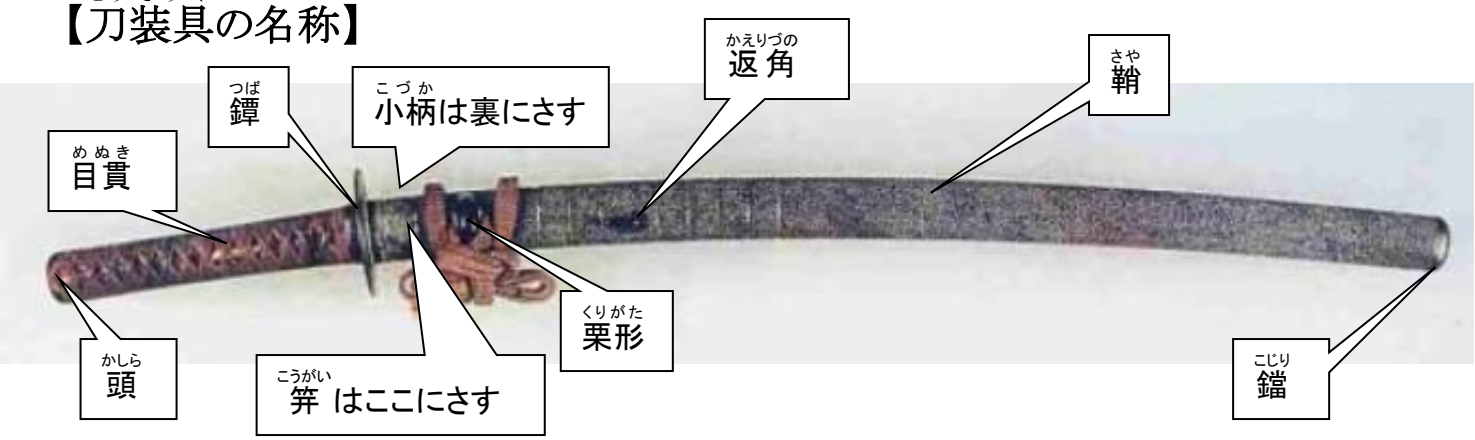
切羽つまる　切羽とは、鐔の表裏にはめる金属の小片で、鐔がガタつかないように付けるもの。これがしっかり決まる、つまり切羽がつまると刀が安定して使いやすい。しかし、人間の場合、切羽つまるとあまりいいことはない。

金　鐔　お菓子の名前にもなっているが、もともとは鐔の表面に薄い金をかぶせ、中に安物の金属を入れてごまかしたもの。見せかけの作品、という意味。

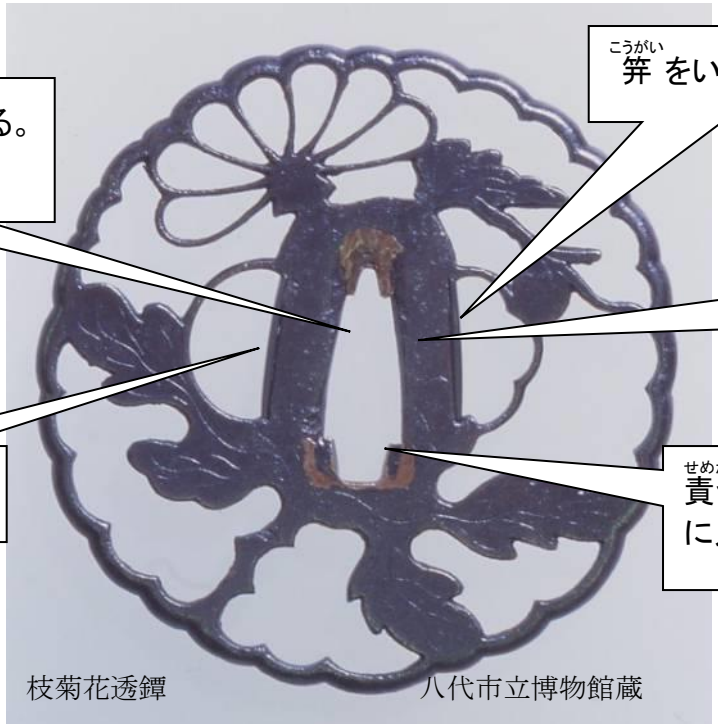
目抜き通り　一番大きな繁華街をいう。刀の柄にはめる目貫が、相手から見てもっとも目立つところにあることから。

ほかにも、刀に由来する言葉は「鎬を削る」「身から出た錆」「付け焼刃」「焼を入れる」「折紙つき」などいろいろあります。今はまったく無縁だと思っている刀の歴史が身近に感じられます。

【刀装具の名称】



【鐔の部分名称】



枝菊花透鐔　　八代市立博物館蔵

材質を知る

金属は、①熱を加えると溶ける。②叩けば延びる。③独特の光沢を持つ。④熱を伝える。⑤電気を通すなど、多くの特性を持っています。人類はこれらの特性を経験的に学び、古くから武器や道具、装飾品を作るのに利用してきました。

金属を加工するには、鍛金（叩き伸ばす）、鋳金(溶かして型にはめる)、彫金など、いろいろな技法があります。どの金属がどれか見分けがつきますか？

鉄・・・鐔に多く使われる金属。鉄を放置しておくと赤く錆びてボロボロになってしまうが、鉄鐔には酸化を防ぐ黒い錆がつけられている。運動場の鉄棒が黒いのも黒錆がついているから。微妙な錆色を出すために、各流派で秘伝の錆付液があった。

素銅・・・銅のこと。10円玉と同じ色。精錬され不純物のない銅を素銅といい、赤味を帯びた銅色をしている。採掘したままで不純物の混じった銅を山金（山銅）という。

真鍮・・・銅と亜鉛の合金。黄色味を帯びた金属で、磨くと金色になり、鉄のように錆びないので重宝された。中国からの輸入品で、16世紀末に国産化したが原料の亜鉛は以後も輸入による。

赤銅・・・銅に金と銀を加えた合金。紫色がかった黒色となり、「烏の水に濡れた羽」の色にもたとえられる。その独特の光沢と色彩から、刀装金具にはよく用いられる。

金・銀・・・金は、その黄金色の輝きと、加工しやすく錆びにくいことから、大昔から世界中で高貴な金属として尊重されてきた。鐔では、象嵌や鍍金という技法によって、文様をあらわす。銀は金の次に大事にされる金属。酸化によって黒くなりやすい。銀と銅の合金を四分一といい、ツヤ消しの銀色が好まれる。

ミュージアム展示解説シート

肥後金工④　八代の金工師−釘谷洞石と聴石

肥後金工の伝統

金属を材料とした工芸品を金工といいます。熊本では、江戸時代に刀剣の外装に用いる金具（鐔や縁頭など）を作る金工が発達し、すぐれた金工師が多く生まれました。

明治時代、八代に住んでいた釘谷洞石は、そうした伝統を受け継ぐ金工師のひとりです。

釘谷洞石（本名信次）は、幕末の天保 14 年（1843）熊本北新坪井に生まれました。熊本城下の坪井一帯には、当時金工師などの職人が多く住んでおり、そうした環境のなかで信次も少年の頃から金工を学び、はやくも17歳で独立したといわれています。

信次は刀装具を中心に作り、作品には「東肥親信」という銘を入れています。この頃の作品はほとんど残っていませんが、肥後金工のすぐれた作品を集めた『肥後金工大鑑』（1964 年、日本美術刀剣保存協会発行）に「東肥親信」銘の鐔が掲載されており、確かな腕を持った金工師であったことがわかります。

← 桐唐草文象嵌鐔　銘「東肥親信」
『肥後金工大鑑』（1964 年、日本美術刀剣保存協会発行）より

釘谷信次＝洞石（左・当時52歳）と栄太郎＝聴石（右・29歳）
明治27年（1894）コロンブス博覧会への出品を記念して撮影されたもの。

熊本から八代へ――刀装具からの転換

明治 8 年（1875）、33 歳のとき信次は家族を伴い八代に移住してきました。その後、明治 40 年（1907）65 歳で亡くなるまで、八代に住んで制作活動を続けました。（最初は旧中島町木ノ場＝現本町2丁目、のちに旧二之町＝現本町1丁目へ転居）

明治初年に廃刀令が出され、刀装具の需要が少なくなったので、金工師たちの生活は楽なものではありませんでした。信次も、八代へ来てからは飾り置物や装身具、文房具といった作品を主に作っていたようです。明治 14 年（1881）頃から、作品に「洞石」と銘を入れるようになりました。

現在、小花瓶や矢立（携帯用の筆と墨入れ）、時計鎖などの作品が残っていますが、いずれも細かい模様が丁寧に作られた美しい作品です。

桜に駒文瓢箪形矢立　釘谷洞石作　墨壺蓋裏に銘「釘谷洞石造之」

雲龍文小花瓶　釘谷洞石作　底に銘「肥後八代住　釘谷信次作」

釘谷洞石が持っていた下図帖―鐔などの刀装具の下図が書きためられている。

国内外から高い評価

信次は、明治政府が国内の産業を活発にするために開催した内国勧業博覧会に度々出品し、表彰を受けました。明治 26 年(1893)には、アメリカのシカゴで開催されたコロンブス世界博覧会に出品し、銅賞を受賞しています。

桜花文羽織紐鎖　釘谷洞石作

親子で金工―息子の聴石

信次の息子栄太郎は、慶応 2 年(1866)に生まれ、父とともに八代へ移住。17 歳頃から金工を学び始め、作品には「聴石」という銘を入れています。栄太郎も数々の勧業博覧会や、明治 33 年(1900)に開催されたパリ万国博覧会などに作品を出品しました。

雲文如意　釘谷聴石作　柄に銘「聴石作」

国内外で高い評価を受けた信次・栄太郎親子は、いっぽうで妙見祭に奉納される笠鉾(本町の本蝶蕪)の金具を修理したり、獅子舞(中島町)の楽隊が使うラッパを作ったりしており、身近な側面も知られます。

作品リスト　(これまでに本館で所在を確認したものは下記の作品です。＊印を展示しています)

＊雲龍文小花瓶　洞石作　個人蔵
＊桜に駒文瓢箪形矢立　洞石作　個人蔵
＊桜花文時計鎖　洞石作　個人蔵
＊龍文煙管　洞石作　個人蔵
＊雲文如意　聴石作　本館蔵
桜に駒文瓢箪形矢立　洞石作　松井文庫所蔵
蔦文瓢箪形矢立　洞石作　熊本県立美術館蔵
＊菊花文小花瓶　洞石作(明治 26 年頃)　個人蔵
＊桜花文羽織紐鎖　洞石作　個人蔵
＊松葉茸文時計鎖　洞石作　本館蔵
＊竹文煙管　洞石作　本館蔵

釘谷洞石と聴石関係年表

年　号	西暦	事　　項
天保14年	1843	釘谷信次、熊本市北新坪井2丁目に生まれる。少年の頃から、熊本の金工師竹川五郎作について、象嵌術を学ぶ。
安政　6年	1859	17歳のとき、金工師として独立。刀の鐔など主に刀装具を作り、作品には「東肥親信」の銘を入れる。
慶応　2年	1866	息子の栄太郎生まれる。
明治　8年	1875	33歳のとき、家族を伴い八代木ノ場（旧中島町内＝現在の本町2丁目）に移り住む。
明治13年	1880	本町の笠鉾（本蝶蕪）の金具を修理する。
明治14年	1881	第2回内国勧業博覧会に鉄時計鎖、銅小花瓶を出品し、賞状を受ける。 この頃から、銘を「洞石」と改め、花瓶や鎖など美術工芸品の製作を中心とする。栄太郎（当時17歳）に象嵌法を教え始める。
明治23年	1890	第3回内国勧業博覧会に鉄象嵌五岳文如意、素銅獅子紐龍彫香炉を出品し、賞状を受ける。
明治26年	1893	アメリカ・シカゴで開催されたコロンブス世界博覧会に小花瓶1対を出品し（このうち1点が現存）、銅メダルを受賞する。 栄太郎（当時28歳）も金銀象嵌鉄製時計鎖を出品。
明治28年	1895	栄太郎、第4回内国勧業博覧会に出品。作品には「聴石」の銘を入れる。
明治33年	1900	栄太郎、パリ万国博覧会に出品し、銅賞を受ける。
明治36年	1903	洞石、第5回内国勧業博覧会に鉄製如意を出品し、賞状を受ける。 この頃、住所は八代町398番地。 栄太郎も鉄地象嵌時計鎖各種を出品し、3等賞を受ける。
明治37年	1904	栄太郎、本町の笠鉾（本蝶蕪）の金具を修理する。
明治40年	1907	洞石、自宅にて没する。墓は出町の光徳寺。
大正　2年	1913	栄太郎、熊本県生産品評会に出品し、2等賞を受ける。
大正　3年	1914	栄太郎、久留米市水天宮700年記念共進会に出品し、2等賞を受ける。 この年、中島町獅子組のラッパを作る（現在も使用）。
大正　4年	1915	栄太郎、大典記念国産共進会に、如意（漢詩を象嵌）1点、時計2点、時計鎖（花模様と俳句を金象嵌）1点を出品し、2等賞を受ける。
大正　7年	1918	栄太郎、九州・沖縄物産共進会に如意を出品し、2等賞を受ける。
大正15年	1926	栄太郎、61歳で没する。

釘谷洞石・聴石の作品・関係資料を探しています。情報をお寄せください。34－5555　博物館（山﨑）

ミュージアム展示解説シート

肥後金工⑤　お花見しましょ　―桜さまざま―

肥後藩主細川家では替紋のひとつとして桜紋を用いたことから、火縄銃の銃身や刀の鐔にさまざまな金属加工技術を用いて桜紋がほどこされました。桜の表現の違いを見比べる一風変わったお花見をお楽しみください。

作品解説

1　桜九曜紋象嵌鉄炮（さくらくようもんぞうがんてっぽう）　　一口　本館蔵

品質・形状:　火縄銃の銃身のみ　鉄地　桜・九曜紋を金銀象嵌

法量:長101・8㎝　口径1.4㎝

銘文: 銃身底部に陰刻銘「肥刕住林八助重勝作」　**作者**:林重勝

時代:江戸時代初期（17世紀）

解説:肥後金工の名工のひとり林又七はもと鉄砲鍛冶で、父は尾張出身と伝えられます。この鉄炮は又七の兄重勝の作で、永青文庫にも同人の作があります。細川家の家紋である九曜紋や桜紋が象嵌され、とりわけ銃口部分の波に桜を散らしたデザインと技術は見事です。

2　桜九曜紋透象嵌鐔（さくらくようもんすかしぞうがんつば）　　一口　本館蔵

品質・形状:　鉄地　十木瓜形　角耳　両櫃孔　透彫　象嵌

法量:縦8.1㎝　横7.7㎝

銘文:切羽台左右に陰刻銘「熊府住／秀勝」　**作者**:熊府住秀勝

時代:江戸時代後期（19世紀）

解説:鉄地に九曜紋と桜文を透かし彫りにした鐔。二重唐草文などを金布目象嵌し、耳の縁にも象嵌する細やかさです。作者秀勝の来歴は不明ですが、布目象嵌の文様配置や繊細さ、技法からかなりの腕前をもった金工です。ただし、鉄味はよくありません。

3　桐桜文透鐔（きりさくらもんすかしつば）　　一口　個人蔵

品質・形状: 鉄地　丸耳　両櫃孔　透彫　毛彫　　**法量**:縦7.4㎝　横6.95㎝

作者:無銘　西垣派？　　**時代**:江戸時代中期（18世紀）

解説:肥輪郭線だけの桜花を2輪、べた塗りの桜花を1輪配した中に、桜の花びらの曲線に溶け込むように3つの桐の葉と花を配しており、講ずの巧みさが見事な1枚です。透かし彫り部分の細さや桐の葉脈を繊細な毛彫で表すところも見どころです。

4　網目桜文透鐔（あみめさくらもんすかしつば）　　一口　本館蔵

品質・形状: 鉄地　丸形　丸耳　透彫　毛彫　　**法量**: 縦7.7㎝　横7.4㎝

作者:無銘　林派　　**時代**:江戸時代後期（19世紀）

解説:網目文と桜花を透かし彫りにした鐔です。網目の線に太細があり、整然としていないところや、桜花に入れた毛彫りにもやや稚拙な感があります。

5　桜文散象嵌鐔（さくらもんちらしぞうがんつば）　　一口　本館蔵

品質・形状:鉄地　菊花形　丸耳　両櫃孔　透彫　象嵌　　**法量**:　縦7.35㎝　横7.2㎝　**作者**:無銘　谷清兵衛

時代:江戸時代後期（19世紀）

解説:菊花形の鉄地に、桜文を金布目象嵌しています。やや赤みのある金で、広い面積にほどこした金がふくれをおこし、はがれかけた部分もあります。谷清兵衛は肥後の金工。天保14年（1843）に70歳余で死去。布目象嵌を得意とし、長男が2代目を継いでいます。

6 霞桜透象嵌鐔（かすみさくらすかしぞうがんつば）

一口　本館蔵

品質・形状: 鉄地　竪丸形　丸耳　透彫　象嵌　　**法量**:縦7.7㎝　横7.6㎝　　**作者**:無銘　林派

時代:江戸時代後期（19世紀）

解説:霞に桜文様を透かし彫りにした鐔です。鉄味はよいものの、桜の輪郭などを定型の鏨で打っているところや、糸状に透した部分に貫通していない部分もあることから量産品と思われます。葛菱の文様は金彫込象嵌で表し、裏面には一重の葛菱もあります。

7 桜に駒文象嵌瓢箪形矢立（さくら　こまもんぞうがんひょうたんがたやたて）

一口　個人蔵

品質・形状: 赤銅地　桜花文は高彫色絵　　**法量**:長さ10.3㎝　幅2.6㎝

銘文:墨壺蓋裏に陰刻銘「釘谷洞石造之」　　**作者**:釘谷洞石

時代:明治時代（19世紀）

解説:ひょうたん型のこの作品は、口に筆をおさめ、内部に墨壺を入れた携帯用の筆記用具で、矢立といいます。洞石が得意とした形らしく、この作品を含め鉄製、赤銅製素銅製、銀製のものが4例確認されています。裏の紐通しは、馬形になっており、「ひょうたんから駒」を表しています。

8 桜に駒文象嵌瓢箪形根付（矢立）（さくら　こまもんぞうがんひょうたんがたねつけ　やたて）

一口　本館蔵

品質・形状: 鉄地　桜花文は銀　葉は金色絵　馬は素銅

法量: 長さ7.1㎝　幅2.9㎝

銘文: 蓋裏に金象嵌銘「松」 筆筒に陰刻銘「洞石造」

作者:釘谷洞石

時代:明治時代（19世紀）

解説:桜花形を蓋にして中に墨壺　口に入れ子式筆が入った洞石得意の矢立に更紗地の巾着袋を提げ、青トンボ玉を緒締とする提煙草入の根付として用いたもの。根付とは印籠や煙草入を腰に提げるため、帯に挟んで落ちないようにしたもの。根付・緒締・袋の組合せに持ち主の好みが表れます。

9 桜花文羽織紐鎖（おうかもんはおりひもくさり）

一個　個人蔵

品質・形状: 鉄地　桜花文金象嵌

法量:長さ20.3㎝　中央円径1.9㎝　　**作者**:釘谷洞石

時代:明治時代（19世紀）

解説:こちらも細かい桜花文を金布目象嵌により表した羽織紐です。桜花文には、べた塗りの桜花と輪郭のみの桜花があり、花びらの散らし具合、余白のとり方も絶妙。旧八代城下町の中心部、本町の有力商人がコレクションしていたもので、自慢の逸品だったことでしょう。

10 桜花文時計鎖（おうかもんとけいくさり）

一個　個人蔵

品質・形状: 鉄地　桜花文金象嵌

法量: 長さ33.4㎝　幅0.1㎝　　**作者**:釘谷洞石

時代:明治時代（19世紀）

解説:幅1ミリほどの鉄地に細かい桜花文を金布目象嵌により表した懐中時計用の鎖です。布目象嵌とは、金を鉄地に嵌め込むため、溝を竪横に布目のように刻む技法で、現代につながる「肥後象眼」の中心的技法です。これほど小さいにもかかわらず桜の花びらはどれもシャープで正確。まさに「超絶技巧」の金工師といえます。

※釘谷洞石については 「ミュージアム解説シート④　八代の金工師　釘谷洞石と聴石」をごらんください。

ミュージアム展示解説シート

肥後金工⑥　細川三斎（さんさい）と八代（ひごごしらえ）―肥後拵の魅力分析―

細川三斎と八代

細川三斎（忠興）は、永禄6年（1563）細川藤孝（幽斎（ゆうさい））の長男として生まれました。妻は明智光秀の娘・玉（ガラシャ）。隠居剃髪後（いんきょていはつご）は三斎宗立（そうりゅう）と名乗りました。寛永9年（1632）国替で息子の忠利が肥後熊本藩主となり、三斎は中津（現大分県中津市）から八代城に移り住み、正保2年（1645）、八代城北の丸で亡くなりました。三斎について八代に来た平田彦三、彦三の弟子西垣勘四郎、彦三の甥志水仁兵衛ら金工職人によって、肥後金工が発展しました。

細川三斎と肥後拵

すぐれた武将であり、茶の湯をはじめ、和歌・能楽・絵画に通じた文化人であった三斎の美意識は、武具や刀装具のデザインにも発揮され、三斎が好んだスタイルが細川家の御家流として尊重されました。このうち、有名なのが「信長拵（のぶながごしらえ）」と「歌仙拵（かせんごしらえ）」です。「信長拵」は加賀の刀工信長作の刀を納めた拵で、当初ものは現存しません。一方、「歌仙拵」は、関の刀工兼定作の刀を納める拵で、三斎が八代城在城の折、奸臣（かんしん）6名（36名とも）を成敗したという言い伝えから、六歌仙（三十六歌仙）にちなんでその名があるといわれています。

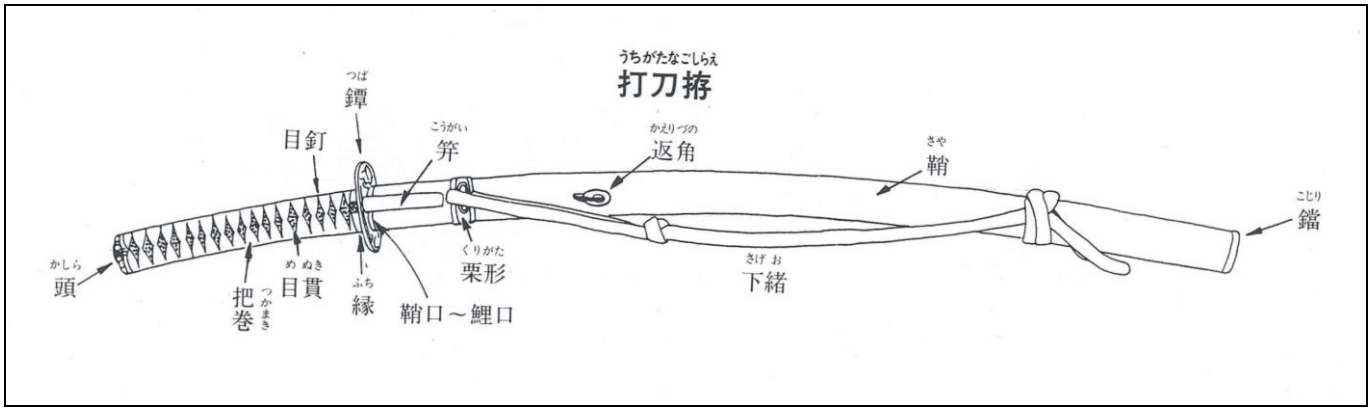
いずれの拵も、柄は黒漆塗の鮫皮の上に燻革（ふすべがわ）を巻き、縁（ふち）にも革を被せ、鞘は黒漆塗の鮫皮を研（と）ぎ出し、よく鍛えられた鉄地の透鐔をかけています。一見地味ながら、凝った細工と武将好みらしい豪放（ごうほう）さが発揮されており、肥後拵の代表といわれています。

肥後拵の特徴

肥後拵は、三斎が考案し好んだ拵を模範としたものが代表的ですが、肥後で作られた金具を用いて制作された拵の総称でもあります。柄の長さが全長に対して短い、柄頭や鐺（こじり）が締まって形がよい、鯉口と栗形の間が狭いなどの特徴を備えています。これらは片手でも扱いやすく、実戦上の経験に基づいて行き着いた形ともいわれています。

こうした特徴は、豊臣秀吉所用の「金蛭巻朱塗大小拵」（桃山時代・東京国立博物館所蔵）や結城秀康所用の「朱漆打刀拵」（桃山時代・東京国立博物館所蔵）などに原形を見ることができ、三斎が生きた時代に流行ったスタイルの中から、自分好みの形を選び取っていったことがうかがえます。

拵の各部分名称



出品作品

1　打刀拵　（三斎愛用の「信長拵」を模して作られたもの。肥後拵の基本となる刀装。）　　一口

本館蔵　江戸時代（17-19世紀）

頭/山金地　山道に波文鋤出彫　柄/黒塗鮫皮・茶革菱巻　目貫/赤銅地　九曜紋容彫　縁/皺革包　　鐔/鉄地　碗形　銀布目象嵌　（無銘　志水）　笄/赤銅地　花車に秋草文高彫色絵　小柄/赤銅地　餅つき人物図高彫色絵　鞘/鮫皮巻・梅花皮塗　鐺/鉄地　泥摺　下緒/茶革

2　打刀拵　（刃を下にして腰に提げる太刀に対し、刃を上に向けて腰に差す刀を「打刀」という。一口

本館蔵　江戸時代（17-19世紀）

頭/山金地　山道に波文鋤出彫　柄/白鮫皮・茶革菱巻　目貫/赤銅地　独鈷杵形　縁/赤銅地　波に龍文高彫色絵（無銘　平田）　鐔/鉄地　碗形　銀布目象嵌（無銘　志水）　笄/赤銅地　波に蛸文高彫色絵　小柄/赤銅地　波に龍文高彫色絵　鞘/黒石目地塗　鐺/鉄地　泥摺　下緒/紫平緒

3　打刀拵　　一口

本館蔵　江戸時代（17-19世紀）

頭/山金地　山道に波文鋤出彫（無銘　平田）　柄/白鮫皮・黒糸菱巻　目貫/赤銅地　形象不明　縁/赤銅地　波文高彫色絵（無銘　平田）　鐔/鉄地　変わり九曜紋透彫　銀彫込象嵌（無銘　志水甚吾（三代力）　鞘/黒石目地塗　鐺/鉄地　泥摺　下緒/黒平緒

4　半太刀拵　（兜金や石突など太刀拵の金具を備えながら下緒を通す栗形を備えたもの。）　一口
個人蔵（本館寄託）　江戸時代（17-19世紀）
兜金/赤銅地　柄/白鮫皮･茶糸菱巻　目貫/銀地　三階菱紋容彫　縁/赤銅地　鐔/鉄地　木瓜形　赤銅覆輪　四方猪目透　切羽台左右に陰刻銘「八代／三代目甚吾作」　鞘/網代文　青貝微塵散　石突/赤銅地　下緒/白紺平緒

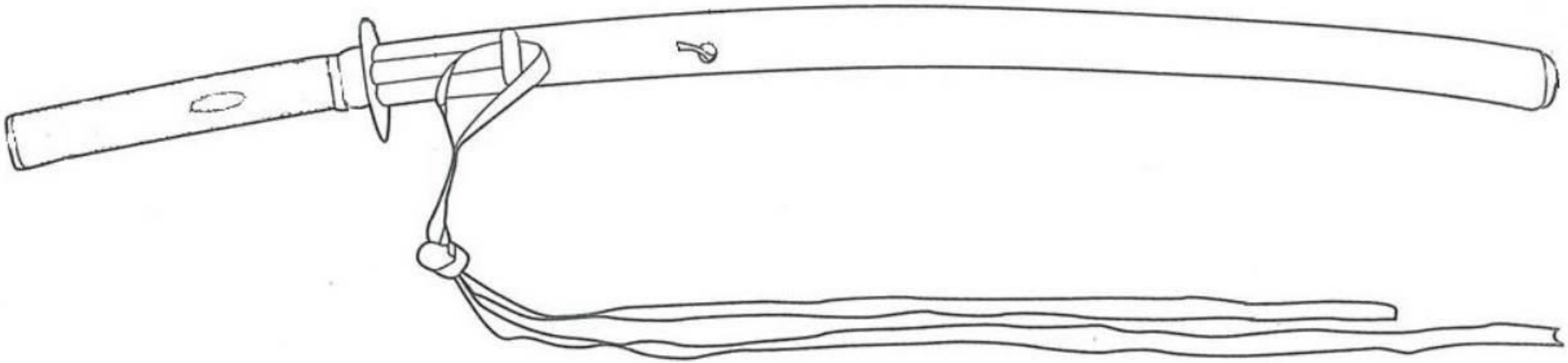
5　脇指拵　（武士の正装では大小二本の刀を着用する。大を本差、小を「脇指」と呼ぶ。）　一口
個人蔵（本館寄託）　江戸時代（17-19世紀）
頭/赤銅地　柄/白鮫皮･黒革菱巻　小柄･笄･目貫（三所物）/赤銅地　折墨形高彫色絵　鐔/鉄地　木瓜形　赤銅覆輪　四方猪目透　切羽台左右に陰刻銘「八代／三代目甚吾作」　鞘/雲気文　青貝微塵散　鐺/赤銅地　下緒/白紺平緒

6　打刀拵　一口
個人蔵（本館寄託）　江戸時代（17-19世紀）
頭/素赤地　柄/白鮫皮･黒糸菱巻　目貫/赤銅地高彫色絵　素銅地鉈豆形　縁/素銅地　鐔/真鍮地　木瓜形　波文鋤出彫　（無銘　平田二代カ）　鞘/朱地変わり塗　鐺/素銅地　下緒/白茶亀甲平緒

7　脇指拵
一口
本館蔵　　江戸時代（17-19世紀）
頭/山金地　波文鋤出彫　柄/白鮫皮･黒革菱巻　目貫/赤銅地　枝に鳥文高彫色絵　縁/山金地　波文鋤出彫　鐔/鉄地　丸形　桜文透彫　鞘/黒漆塗　鐺/角黒塗

こ し ら え ぬ り え

オリジナルこしらえをデザインしてみよう！ただし、三斎の「信長拵」みたいにかっこよくネ！



頭（かしら）　柄巻（つかまき）　目貫（めぬき）　縁（ふち）　鐔（つば）　笄（こうがい）　栗形（くりがた）　返角（かえしつの）　鞘（さや）　鐺（こじり）　下緒（さげお）

［**デザインのコツ**　あるテーマにもとづいてコーディネートしてみましょう。例えば、天の川、彦星と織姫、願い事を書いた短冊…で「七夕拵」など］

このこしらえに名前をつけてみましょう　→　「　　拵　」

こちらに投稿して「こしらえ自慢」してください　→　@museum8246

参加賞はありません。

ミュージアム展示解説シート

肥後金工⑦　肥後拵（ひごこしらえ）の魅力―透かし鐔―

細川三斎（ほそかわさんさい）と八代

細川忠興（ただおき）は、永禄6年（1563）細川藤孝（ふじたか）（幽斎（ゆうさい））の長男として生まれました。妻は明智光秀（あけちみつひで）の娘・玉（ガラシャ）です。忠興は隠居剃髪（いんきょていはつご）後、三斎宗立（さいそうりゅう）と名乗りました。寛永9年（1632）国替で息子の忠利が肥後熊本藩主となり、三斎は中津（現大分県中津市）から八代城に移り住み、正保2年（1645）、八代城北の丸で亡くなりました。三斎について八代に来た**平田彦三**（ひらたひこぞう）、彦三の弟子**西垣勘四郎**（にしがきかんしろう）、彦三の甥**志水仁兵衛**（しみずじんべえ）ら金工職人によって、肥後金工が発展しました。

細川三斎と肥後拵

すぐれた武将であり、茶の湯をはじめ、和歌・能楽・絵画に通じた文化人であった三斎の美意識は、武具や刀装具のデザインにも発揮され、三斎が好んだスタイルが細川家の御家流として尊重されました。このうち、有名なのが「信長拵（のぶながこしらえ）」と「歌仙拵（かせんこしらえ）」です。「信長拵」は加賀の刀工信長作の刀を納めた拵で、当初ものは現存しません。一方、「歌仙拵」は、関の刀工兼定作の刀を納める拵で、三斎が八代城在城の折、奸臣（かんしん）6名（36名とも）を成敗したという言い伝えから、六歌仙（三十六歌仙）にちなんでその名があるといわれています。いずれの拵も、柄は黒漆塗の鮫皮の上に燻革（ふすべがわ）を巻き、縁（ふち）にも革を被せ、鞘は黒漆塗の鮫皮を研（と）ぎ出し、よく鍛えられた鉄地の**透鐔**（すかしつば）をかけています。一見地味ながら、凝った細工と武将好みらしい豪放（ごうほう）さが発揮されており、肥後拵の代表といわれています。

肥後拵の特徴

肥後拵とは、肥後で作られた金具を用いて制作された拵の総称です。三斎が考案し好んだ拵を模範としたものが代表的で、柄の長さが全長に対して短い、柄頭や鐺（こじり）が締まって形がよい、鯉口と栗形の間が狭いなどの特徴を備えています。これらは片手でも扱いやすく、実戦上の経験に基づいて行き着いた形ともいわれています。

こうした特徴は、豊臣秀吉所用の「金蛭巻朱塗大小拵」（桃山時代・東京国立博物館所蔵）や結城秀康所用の「朱漆打刀拵」（桃山時代・東京国立博物館所蔵）などに原形を見ることができ、三斎が生きた時代に流行ったスタイルの中から、自分好みの形を選び取っていったことがうかがえます。

肥後拵の魅力　～透かし鐔～

今回の展示は、肥後拵の魅力のひとつである鐔のうち、透かし彫りの技術を用いた**透鐔**（すかしつば）の魅力にせまります。

1543年（天文12年）種子島（たねがしま）に鉄炮（火縄銃）が伝来し、やがて国内でもその生産が行われるようになりました。鉄炮の二大産地に堺と国友村（現在の滋賀県）がありますが、鉄炮をつくる鍛冶職人（かじしょくにん）を抱える武将もいました。

尾張（おわり）（現在の愛知県）出身で豊臣秀吉に仕えた加藤清正もそのひとりでした。鉄炮鍛冶として加藤氏に仕え、父は尾張出身と伝えられる**林又七**（1605頃～91頃）は、のちに細川氏に仕え、鐔などの刀装金具の製作に腕をふるいました。

又七の父の故郷尾張は、地鉄の強さと透かし彫りを旨とする**尾張鐔**（おわりつば）の産地であり、また京都には、洗練された図柄を透かし彫りにする**京透鐔**（きょうすかしつば）や布目象嵌（布目状に彫った溝に、金の薄片を打ち付けて定着させる）の技法を用いた**正阿弥鐔**（しょうあみつば）がありました。

又七の鐔にみられる、よく鍛（きた）えられた地鉄を透かし彫りにし、布目象嵌による文様をほどこす、という特長はこのあたりに由来するようです。その伝統は**肥後象眼**（ひごぞうがん）として現代まで受け継がれています。

桜九曜紋象嵌鉄炮　林重勝作（17 世紀）本館蔵（未展示）

林又七の兄重勝作の鉄炮の銃身です。細川家の九曜紋と桜紋が象嵌されています。
鉄炮製作でつちかわれた高度な技術が、透かし鐔の製作に生かされました。